

隱岐國古記

全

		三〇七五六	和書門
一册	函	號	類

158

庫文閣内			
三五函	三〇七五六		和書
九架	一册	號	類

内閣文庫	
番號	和 30756
册數	1 (1)
函號	158

6 7 8 9 140 1 2 3 4 5 6 7 8 9 150 1 2 3 4 5 6 7 8 9 160 1



孟子曰人皆以爲堯舜
たる者一唯吾獨惡也此
れこその人を見らば待た
ば其外は皆く
藝に委れし人の多
し中にもれし如き此智恵
は其の如き天地の如く
よく生れ出さるる如く
人皆今も於て是れを驚く

ふかり浅くしたと恥しれ
侍りぬ而も思へど風程の聲
貨をふられし詩を舞曲に
及を以むあしくも浅く
自てまじし思ぬものも
人思書きてしもの浅く
あけ免てはし書きぬ
書はる王彼雲陽亦友君の
隠州視穂合記ふあし見んと
早卒中てゆがみ終ふ白紙を

費は昔字に張思辨座右銘
と云く凡諸を為し以て行
名必是篤致終を以て法節
に字書に必は以て楷正と教
あを古人の以てんを
かたりみまはなくの悪人
那らぬは唯文家に納て終る
せんのこと

平時文政六秋九月大西教保
書

隠波古記集鳴後

隠洲の所をは歴代史を考
るに日本北乾地は風を以て
限りやいとも也雲州三保関
より三拾五里震地ふをる爲
後と不同吾郡越智郡馬に
属す其南岸を西郷といふ
必中北府より東より大久村
より西は油井村と長五里
三拾町水と島村と南ハ今津

村迄横六里半と凡海の地廻り
松八里程是より坤地半位
ると鴻前とよみ知吏里郡
海士郡馬小島を所謂之
小分る知吏里郡三海
海士郡三海別府村を以て
府と次之南を知吏里村と
宇賀村冠島之磯と四里余長
と凡東を布施村より西を
田村和越の西の出島と三里
余と凡鴻三島周りに六里程又

未申の方五枚八里小して石州
温泉津ゆゑる辰巳の方四里
伯耆赤崎あり卯方凡百里
ゆゑ若州小濱より其宮
方凡百三枚里能成あり
亥の方四半里小して松前より
同方凡五里程小して甘木を以
岩崎とよみ又南の方七十里程に
竹崎とよみ傳ふ竹本縣を以て
大島の由是を朝鮮城守めは

隠州より雲州と見らるり尚
近くや云今も朝鮮人其便を
とき思諸島の船人お留るる
お方南誠お統り秋法天嵐の
日小大満寺山の頂上より望みん
る雲嶋を遠く見へんとお竹
高き朝鮮北池山お懐うれ
きく望みは朝鮮地と見え
る由愚按尚ほお古より磯竹
と云傳へり視社合記今も朝鮮
お見へり

の海面を見るに彼を市原より
宮中の方赤對るお豊浦を
方お南りてうらやま蔚陵嶋といふ所
そよ浦の丑ノ方よりイラガキ高き山
有て見ゆ彼をを呼んで尚地
此人磯嶋と号しあらん尚
お百里の内おに彼を治り
お見へはる由おり人の住居
さるも近ひあてい有るお豊良
大關征伐の時お治の城を朝

解人菟城之と有り 朝解征伐記
小見あり
彼是を見よに竹嶋を別高と
し、及や見よ亦昔陰陽
の二神二嶋を 隱波生ありあり
佐波
と或云山海中此嶋由一遠 古 岐
也又高前英田の布御より宮
の方七所大山明神の社ふ言サ
甲子詔ふの本あり皇此始
神武天皇勅して海本と宣
ふより海本玉の名と云と云之

按するに二神日本武大八咫
とハツ分中ハ五歳古遠のこ
と然十三代成務帝是之造長
を立多しまに楯矛を賜り
り天下の必割成成ふ初ち
二神之神定めを尊しせうひ
て目此乃成以て必を定め東
西を日縦と一南を日横と
一山陽を新面と云ひ山陰
を背面として三十三ヶ所小分